

令和5年度（第72回）「神奈川文化賞」及び 「神奈川文化賞未来賞」の受賞者プロフィール

神奈川文化賞

はせがわ かい
長谷川 權 (69歳)

●文学●

現代の俳句の振興と
普及に尽力



中学時代、国語教師との出会いに恵まれ、古典や俳句に親しんだ。大学時代はホトトギス会、学生俳句会に所属、のちに俳人・飴山實を師とした。読売新聞社に入社し、記者生活の傍ら俳人としても活動。1985年に第一句集『古志』で注目され、1990年に俳論集『俳句の宇宙』でサントリー学芸賞を受賞。1993年、俳句結社「古志」を主宰。2000年に読売新聞社を退社し専業俳人となり、朝日俳壇の選者に就任した。2003年『虚空』で読売文学賞を受賞。2011年の東日本大震災の折には『震災歌集』『震災句集』を緊急出版し、現在まで数多くの句集や俳句の評論、エッセイを発表し、現代の俳壇をリードしている。

2008年に日本人が長年育んできた季語と歳時記の世界を探究する場として「季語と歳時記の会」を設立し、現在まで代表を務めている。自身が運営するウェブサイト「俳句的生活」ではネット俳句を主宰、『一億人の俳句入門』など、数多くの俳句入門書も手掛け、俳句の振興と普及に尽くしている。

2011年から公益財団法人神奈川文学振興会副理事長をつとめ、神奈川県立神奈川近代文学館の事業に深く関わるほか、毎年開催される「かなぶん連句会」の選者も務めている。

[藤沢市在住]

神奈川県文化賞

かみじょう ようこ
上條 陽子 (86歳)

●芸術●

芸術振興と国際交流に貢献



©神奈川県新聞社

横浜に生まれ、独学で絵画を制作しながら「美術界の芥川賞」と言われた安井賞を女性で初めて受賞。その後、ペーパーワークを主とした現代美術家として活躍し、相模原をはじめ、神奈川県立近代美術館や横須賀美術館など、数々の美術館や画廊で人々の心に響く作品を発表している。

また、相模原芸術家協会の会長を永年務め、後進の育成を図りながら、地域の人々に優れた作品を提供するだけでなく、子どもセンターでのワークショップの実施や、同市の友好都市である中国・無錫市やカナダ・トロント市との交流展の開催に尽力するなど、国際的な活動にも積極的に関わり、地域文化振興に貢献している。

絵の具を集めてレバノンのパレスチナ難民キャンプを訪れ、現地の子どもたちに絵画指導をすることから始まった命がけの難民支援は、10 数回にも及ぶ。その交流で生まれた彼らの絵画を国内各地で発表するなど、アートを通してパレスチナの現状を伝える活動が、多方面から称賛されている。特に、実現不可能と言われたパレスチナ・ガザ地区の画家の日本への招聘は、大きな話題となった。2022 年、文化庁長官表彰受賞。

近作では横浜空襲の体験を基とした作品制作に挑んでおり、アートを通して世界平和をめざしている。

[相模原市在住]

神奈川県文化賞

まつい としお
松井 利夫 (80歳)

●産業●

起業家育成や地方創生に貢献



©神奈川県新聞社

1968年に25歳で、機電一体（メカトロニクス）設計業を独力で創業し、1971年に有限会社アルプス技研を設立（1981年株式会社アルプス技研となる）した。設計技術者の派遣・請負業のパイオニアとして労働者派遣法の制定、アウトソーシングという潮流が起こる中で、「企業は人なり」を信念に研修や訓練など社員教育に力を注ぎながら、製造業の製品開発・設計支援、技術者派遣、技術請負などに事業を拡大した。1997年に会長職となり、自身の起業体験から社内外の起業を志す人達に対し起業に必要な心得の伝授、また経済的な支援と物心両面からの起業支援も行ってきた。「地方創生のためには、地域で次世代の起業家を育てることが重要」との思いから、50年余の経営者人生の経験を活かし、日本各地で起業家育成、まちづくりに尽力している。

また、2006年に私財を投じて特定非営利活動法人ふれあい自然塾を設立し、自然や社会の恩恵を感じながら生きる大切さが体感できる自然体験の場を青少年やその家族らに提供している。さらに、少子高齢化に対応するため、国境を越えた優秀な人材のグローバル化を目指し、ミャンマーにIT技術者養成コースや介護補助専門家コースを開設するなど人材育成にも協力・支援している。

[相模原市在住]

神奈川文化賞

おかべ のぶひこ
岡部 信彦 (77歳)

●保健衛生●

新型コロナウイルス等の
新興感染症を含む感染症
対策における功績



慈恵医大卒、県立厚木病院小児科、県衛生看護専門学校附属病院小児科部長、WHO 伝染性疾患予防対策課長、慈恵医大小児科助教授、国立感染症研究所感染症情報センター長などを経て、2013年に川崎市衛生研究所（現、健康安全研究所）所長。衛生行政を支える研究機関として、感染症、食の安全・安心、健康危機管理等の分野で、検査・調査・研究・情報発信・研修などの業務の陣頭指揮を執っている。

「川崎市民、ひいては地域、国、そして地球上の人の健康向上を」との思いから、医療機関、保健所、市、および県担当部局とも連携を取り、住民の健康で安全な暮らしを支えている。新型コロナウイルス感染症については、正しい情報を市民に伝達するとともに、感染症対策専門家として厚労省新型コロナウイルス感染症アドバイザーボード・内閣官房新型コロナウイルス感染症専門家会議などに参画、内閣官房参与（感染症対策）等を歴任し国に提言をしてきた。

コロナウイルス感染症対策、感染症法改正、感染症危機管理統括庁設置に向けた内閣法改正案などについて国会予算委員会、内閣委員会などにおいて参考人として意見陳述などを行った。

小児科医としての診療、ウイルス学・ワクチン開発の研究、WHOでの感染症対策・危機管理なども行ってきている。

[東京都在住]

神奈川県文化賞未来賞

いしかわ なおや
石川 直也 (36歳)

●芸術●

彫刻家として活躍



2010年、東京藝術大学彫刻科卒業。卒業制作展で東京都知事賞・安宅賞を受賞している。2012年に同大学修士課程を修了し、その際の修了制作展で再び東京都知事賞を受賞。石彫の高い技術水準を評価され、同時に彫刻へと独自のアプローチも注目を集めた。

その後、多くのコンペに参加し、入選を果たし、個展とグループ展で発表を続けている。

現在、制作の傍ら、藤沢市江ノ島で画廊 Gallery Gigi を運営し、同世代の作家たちを中心に美術家の連携を図っており、その業績も評価に値する。

スタイルは、近年、「自立しない人」というコンセプトで、支えなしのそれだけでは立たない彫像を制作し、彫刻として成立すると同時に、人や空間、物理的現象とも関わり合いながら、「『立つ』とは何か」などの探究へと繋がっている。それは「もの派」の場所性ではない、多様な空間関係の対話を引き起こすユニークなものであり、目覚ましい展開を遂げつつある。

そして、それは自分以外の表現者とのコラボレーションも可能とすると評価されている。

湘南で制作と画廊活動を展開し、将来、神奈川県内の文化水準の向上に貢献できる可能性のある若い才能のひとりである。

[藤沢市在住]

神奈川県文化賞未来賞

さかた ともき

阪田 知樹 (29歳)

●芸術●

ピアニストとして活躍



©Ayuset

2011年のデビュー以来、県内をはじめ数々のコンサートに精力的に出演し、若い年齢層の関心を引き、クラシックファンの裾野を広げている。YouTube等SNSでの発信も積極的に行い、現代の音楽家らしい活動が注目される。

2013年「ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール」で史上最年少ファイナリスト(19歳)、2016年「フランツ・リスト国際ピアノコンクール(ブダペスト)」で第1位、6つの特別賞、日本人男性初優勝など、数々の国際コンクールで入賞や優秀な成績を残し、2021年に世界三大ピアノコンクールとされる「エリザベート王妃国際音楽コンクール」ピアノ部門で第4位入賞。

深い学識に裏打ちされた鋭い分析で作曲家にアプローチし、その表現に対する研究心と実践する高い技術力は専門家にも高く評価されている。

2023年2月、新進音楽家に贈られる「出光音楽賞」を受賞し、今、最も活躍が期待されるピアニストの1人として注目されている。

2015年CDデビュー、2020年3月編曲作品アルバムをリリース。編曲集「ヴォカリーズ」を2022年5月に、「夢のあとに」を2023年7月に出版。

今後一層の活躍と、神奈川の音楽文化の向上発展に大きく寄与することが期待される。

[横浜市在住]